

# 「白楽天の李杜観」

前川幸雄

序、

中唐の詩人白居易、字は楽天（A.D.七七二〜八四六）は、陶淵明、陳子昂、李白、杜甫、韋応物等を先達詩人として尊敬している。その李白（A.D.七〇一〜七六二）、杜甫（A.D.七一二〜七七〇）に対して、楽天は、どのような見方、評価をしていたのか。この問題について、楽天の詩文集『白氏文集』の李白、杜甫に言及する作品によって考え、李杜没後の比較的早い時期の詩人である楽天の見解をまとめてみたい。そして、両者に対するその評価の特徴を明らかにしたいと思う。

## 二、李杜に言及する楽天の作品

李白、杜甫に言及している楽天の作品は八つある。それを、製作年代順に読んでみることにする。

なお、各作品の初めに、①作品番号、②篇目、③出典、④分量、⑤分体、⑥製作年、⑦場所、⑧年齢、⑨皇帝名、を記す。

- (一) ①0014 ②初授拾遺 ③001 ④除授 ⑤五古 ⑥元和三(808)年 ⑦京(長安) ⑧三七歳 ⑨憲宗

この作品は、巻一の「飄論」に分類されている。前年の元和二年十一月の翰林学士に続いて、元和三年四月、三十七歳で憲宗により、左拾遺に任ぜられた時の、長安での作である。楽天は諫官の職に就けたことを感謝し、かつて杜甫がこの職に就いたことを思い、重責と誇りを感じ、任務に励もうとしている。張り切った気持ちが出ている作品である。

初授拾遺 初めて拾遺を授けらる

- |    |       |               |
|----|-------|---------------|
| 11 | 驚近白日光 | 白日の光に近きことを驚き、 |
| 10 | 寵至不自意 | 寵至って自ら意はず。    |
| 9  | 況予蹇薄者 | 況んや予の蹇薄なる者、   |
| 8  | 尚無過斯位 | 尚は斯の位に過ぐる無し。  |
| 7  | 當時非不遇 | 當時遇はざるに非ず。    |
| 6  | 才名括天地 | 才名天地を括ぬ。      |
| 5  | 杜甫陳子昂 | 杜甫 陳子昂、       |
| 4  | 且脱風塵吏 | 且つ風塵を脱するの吏。   |
| 3  | 何言初命卑 | 何ぞ言はん初命の卑きを。  |
| 2  | 束帶參朝議 | 束帶して朝議に參す。    |
| 1  | 奉詔登左掖 | 詔を奉じて左掖に登り、   |

- 12 慚非青雲器 青雲の器に非ざることを慚ぶ。  
 13 天子方從諫 天子方に諫に従ふ。  
 14 朝廷無忌諱 朝廷忌諱無し。  
 15 豈不思匪躬 豈に匪躬を思はざらんや。  
 16 適遇時無事 適たま時の事無きに遇へり。  
 17 受命已旬月 命を受けて已に旬月、  
 18 飽食隨班次 飽食班次に隨ふ。  
 19 諫紙忽盈箱 諫紙忽ち箱に盈つ。  
 20 對之終自愧 之に對して終に自ら愧づ。

この詩の五く八句で杜甫と陳子昂を併記している。また、  
 天は、兩者と愚鈍な己とを對比している。

ここでは、

○(兩名は)才能と名聲は天地を兼ねるほどであった。

○名君に遇わなくてもなかつたが、拾遺の官以上にはなれな  
 かつた。

と述べる。楽天は、杜甫は才能の割には不遇である、と見てい  
 るのである。

この意識は、次の作品にも引き継がれる。

- (11) ① 0448 ② 號鄒舫詩 ③ 02 ④ 詩 ⑤ 五古

⑥ 元和三(808)〜元和六(811)年 ⑦ 京 ⑧ 三七〜

四〇歳 ⑨ 憲宗

この作品は、卷十の「感傷」に分類されているもので、元和  
 三〜六年、楽天三十七歳〜四十歳の間に、長安で作ったときれ

る。

この頃は、楽天は、儒教思想を強く持ち、政治に対して極め  
 て意欲的であった。

鄒舫という人は、「鄒舫張徹落第」(同前巻一、諷諭、五言古  
 詩、元和三(八〇八)年、長安での作)という作品、また「与  
 元九書」にも出て来る、楽天の詩を好み、その文学観を同じく  
 した人物である。詩には、不幸にして、不遇の極において若死  
 にした鄒舫を悼む楽天の「感傷」の気持ちが出ています。

読鄒舫詩 鄒舫の詩を讀む

- 1 塵架多文集 塵架に文集多し、  
 2 偶取一卷披 偶たま一卷を取って披く。  
 3 未及看姓名 未だ姓名を見るに及ばずして、  
 4 疑是陶潛詩 疑ふらくは是れ陶潛の詩かと。  
 5 看名知是君 名を見て是れ君なるを知り、  
 6 側側令我悲 側側として我をして悲ましむ。  
 7 詩人多蹇厄 詩人 蹇厄多し、  
 8 近日誠有之 近日 誠に之有り。  
 9 京兆杜子美 京兆の杜子美は、  
 10 猶得一拾遺 猶ほ一拾遺を得たり。  
 11 襄陽孟浩然 襄陽の孟浩然も、  
 12 亦聞贊成絲 亦た聞く贊の絲と成るを。  
 13 嗟君兩不如 嗟へああ君は兩ながら如かず、  
 14 三十在布衣 三十にして布衣に在り。  
 15 擢第祿不及 第に擢んでられて祿及ばず、

- 16 新婚妻未帰 新婚して妻未だ帰へとつゝがず。  
 17 少年無疾患 少年にして疾患無く、  
 18 溢死於路岐 路岐に溢死す。  
 19 天不与爵寿 天は爵寿を与へず、  
 20 唯与好文詞 唯だ好文詞を与ふるのみ。  
 21 此理勿復道 此の理 復た道ふこと勿れ、  
 22 巧曆不能推 巧曆も推すこと能はず。

第七く十句にいう。

- 詩人には災厄が多く、最近でもたしかに、そういう人がいる。  
 ○ 杜甫はそれでも拾遺にはなった。  
 ○ 孟浩然は、白髪になった。(そして官を得た)ときいている、と。

楽天の考えでは、才能のある者は十分な地位も寿命も与えられるべきである。杜甫は、才能のある人であるから、鄧魴よりはましとしても、拾遺ぐらいいにとどまる人ではなく、当然高位に就いていいはずである。つまり、杜甫は不遇の人であったと、いうのである。

この杜甫、孟浩然、及び鄧魴に対する同情は、結局、楽天の文学に対する認識と関係するのである。

その認識の一端は次の作品によって何うことが出来る。

- (三) ① 0035 ② 傷唐衢二首その二 ③ 001 ④ 哀傷 ⑤ 五

古 ⑥ 元和六(811)〜元和九(814)年 ⑦ 京

⑧ 四〇〜四三歳 ⑨ 憲宗

この作品は、巻一の「飄論」に分類されているもので、元和六く九年、楽天四十く四十三歳の間に長安で製作された。政界における苦勞、母親陳氏の死にあい下邳に退き、そこで娘金鑾を喪う等の苦悩を経て、往年の儒教的的人生觀が、かなり揺らいで来ている頃の作品である。

楽天には、この連作の他に、「寄唐衢」(0033、巻一、五言古詩、元和三く五(810)年、長安での作)という作品がある。

この唐衢という人は、「与元九書」にも出て来るが、「唐衢善哭」といわれた、悲しい文章を読んでもすぐ哭するといふ多感な性質の詩人である。歌詩を良くした、楽天とも交渉のあった人である。旧唐書の百六十に伝記がある。

傷唐衢二首 その二 唐衢を傷む二首 その二

- 1 憶昨元和初 憶ふ昨元和の初、  
 2 忝備諫官位 忝く諫官の位に備はる。  
 3 是時兵革後 是の時兵革の後、  
 4 生民正憔悴 生民正に憔悴す。  
 5 但傷民病痛 但へただ民の病痛を傷んで、  
 6 不識時忌諱 時の忌諱を識らず。  
 7 遂作秦中吟 遂に秦中吟を作り、  
 8 一吟悲一事 一吟一事を悲しむ。  
 9 貴人皆怪怒 貴人は皆怪しむ怒り、  
 10 閑人亦嘗言 閑人も亦嘗言す。  
 11 天高未及聞 天高うして未だ聞ゆるに及ばず、

- 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12
- 荆棘生滿地 荆棘滿地に生ず。  
 唯有唐衢見 唯唐衢のみ見る有り、  
 知吾平生志 吾が平生の志を知る。  
 一読與嘆嗟 一読して嘆嗟を興し、  
 再吟垂涕泗 再吟して涕泗を垂る。  
 因和三十韻 因つて和す三十韻、  
 手題遠緘寄 手づから題して遠く緘寄す。  
 致我陳杜間 我を陳杜の間に致し、  
 賞愛非常意 賞愛すること常の意に非ず。  
 此人無復見 此の人復び見る無し、  
 此詩尤可貴 此の詩尤も貴ぶ可し。  
 今日開篋看 今日篋を開いて看れば、  
 蠹魚損文字 蠹魚文字を損す。  
 不知何処葬 知らず何の処にか葬る。  
 欲問先歎歎 問はんと欲して先ず歎歎す。  
 終去哭墳前 終に去つて墳前に哭し、  
 還君一掬淚 君に一掬の涙を還さん。  
 陳杜謂子昂与甫也。此詩尤可貴、謂唐衢詩也。

初句から十二句まででは、元和三年に諫官に就いてから、人民のために、天聰に達せんがために、時の弊害を作品に表したのだが、これを読んだ貴人は怪しみ、賤人もまた私を誹謗した、と述べる。

十三句から二十句まででは、唐衢君だけは、私の志を理解してくれて、詩を読んで感動し、和詩三十韻を作つて送つて寄越

した。そして、私を陳子昂、杜甫の列に推称し、大変に賞揚してくれた、という。

二十一句から末句まででは、唐衢を悼んでいる。

唐衢には、陳子昂と杜甫が『詩経』以後衰えた諷論詩を、再び製作し始めた先聲として意識されていたのであろう。この唐衢の認識は、陳子昂や杜甫に啓発された、この頃自らの手紙「叙詩寄楽天書」(0757、元和十(八一五)年、三十七歳、通州での作)で述べる元稹にもあったのである。つまりこの認識は、「新樂府」を作つた楽天の仲間に通ずるものであった。更に楽天には、我こそはその伝統を継承発展させる者であるとの意識があったであらう。それは、唐衢の気持としてではあるが、十九句に「致我陳杜間」と述べていることで明らかである。

結局、ここでは、

○杜甫は諷論詩を(『詩経』後)再び製作し始めた人である。

ということであらう。

そして、次の詩になると、李白を視野に入れて、李白、杜甫の全体を見るのである。

(四) ① 0600 ② 詠李杜詩集因題卷後 ③ 03 ④ 詩

⑤ 五排 ⑥ 元和十(815)年 ⑦ 途(旅途) ⑧ 四四

歳 ⑨ 憲宗

この作品は、巻十五の「律詩」に分類されている。

この作品が出来るまでの事情を少し述べたい。元和九(八一四)年、楽天は四十三歳であった。この歳の暮れ、楽天は、元和六(八一)年に亡くなった母親の陳氏の喪があげ、下邳か

ら長安に召された。そして、太子左贊善大夫（皇太子の補佐官、補導の職）を授けられ、昭国里に居た。

明けて十（八一五）年六月三日、宰相の武元衡（乾元元（七五八）年）と元和十（八一五）年）が、宮廷へ参内の途中、靖安里の自宅の近くで暗殺されるという事件が起きた。楽天は、あるまじき事件に憤慨し、上訴して、急ぎ刺客を捕らえ、国辱を雪がんことを請うた。ところが、楽天の言動は、諫官を差し置いた越権行為であるとして、その責任を問われるという結果を招くのである。官吏としては、これまで、まずまず比較的順調に來たと言ってもいいであろう楽天にも、不遇の時代が訪れたのである。

そして、楽天が自作品の中で李白に言及することはこの時代において始まる。

楽天、四十四歳は、この事件で、江州刺史（江西省付近の知事）に出され、次いで八月には改めて江州司馬に貶せられる。その任地に赴く旅途での製作である。

### 読李杜詩集因題巻後

李杜の詩集を読み、因って巻後に題す

- 1 翰林江左日 翰林 江左の日、
- 2 員外劍南時 員外 劍南の時、
- 3 不得高官職 高き官職を得ず、
- 4 仍逢苦乱離 仍ほ苦しき乱離に逢ふ、
- 5 暮年通客恨 暮年 通客の恨、
- 6 浮生謫仙悲 浮生 謫仙の悲、
- 7 吟詠流千古 吟詠 千古に流れ、

- 8 声名動四夷 声名 四夷を動かす。
  - 9 文場供秀句 文場 秀句を供し、
  - 10 楽府待新詞 楽府 新詞を待つ。
  - 11 天意君須会 天意 君須らく会すべし、
  - 12 人間要好詩 人間 好詩を要む。
- 賀監知章目李白為謫仙人。

この詩は、李白と杜甫を交互に、ほぼ公平に詠じている。但し解釈には三説がある。

(一) 李白のことは、第一、三、六、十句に、杜甫のことは、第二、四、五、九句に述べている。第七、八句は両者のことを述べ、第十一、十二句は、総合して結論を述べている。

(二) 李白のことは、第一、六句に、杜甫のことは、第二、五句に述べている。両者のことを、第三、四、七、八、九、十句に述べている。第十一、十二句は両者を総合した結論である。(三) 李白のことは、第一、五、六、八、十句に、杜甫のことは、第二、三、四、七、九句に述べている。第十一、十二句は、両者を総合した結論である。

とするものである。

李白が翰林供奉（皇帝の秘書、詔勅等を作る官）となったのは、この時を去る七十二年前の天宝二（七四三）年であり、辞去したのは、天宝三載（七四四年）で、四十三歳から四十四歳にかけてのことであった。この李白が官を辞した時の年齢は、偶然のことながら、白楽天の今の年齢と同じである。

また先にも李白が遊んだことのある江左の地（長江下流の南

部江蘇、浙江一帶)は、江を遡れば、楽天が流される江州に連なる。またその江州は、李白が、至徳二載(七五七年)、五十七歳で永王璣の幕佐となり、永王敗死するや、連座の罪に問われ捕らえられた所である。こんな因縁が、楽天が李白に思いを致し、その詩集を読む一因となったのであろうか。

また、李白が蘇頌に文才を認められたのは、二十歳の時(開元八(七二〇)年)であり、賀知章の知遇を得た時は、四十二歳の時(天宝元(七四二)年)であった。

楽天が、文名をもって鳴る願況を嘆称せしめたと伝える「賦得古原草送別」を作ったのは、十五・六歳(貞元二・三(七八六・七)年)の頃であり、翰林学士となったのは、三十六歳(元和二(八〇七)年)であった。

従って、少なくとも、官界、文壇における運の良さでは、楽天は李白に過ぎることはあっても劣ることは無かったと言えるのである。それだけに、李白が翰林供奉を最後に高位に登ることもなく、また、賀知章のいう「謫仙人」の悲しみを抱いたことは、官位は自分の方が上であり、しかも李白に似て、罪を着せられて流されることからして、楽天にとっては、他人事には思えなかつたであらう。恐らく、楽天の眼には李白の不遇と今の自分の不幸とが、重なり合つて写っていたのに違いない。

さて、三説の(一)によって、まとめると次のようになる。  
李白に対する見方

- ①翰林学士である李白は江左つまり呉地方に遊んだ事がある。
- ③高い官職を得ること無く終わった。
- ⑥謫仙の悲しみを抱いた。

⑩樂府に新詞を提供した。

杜甫に対する見方

- ②工部員外郎である杜甫は劍南つまり蜀に遊んだことがある。
- ④戦乱に遭い一族離散の苦しみに逢った。
- ⑤晩年に隨者のような苦しみを味わい身の上を恨んだ。
- ⑨文壇に秀句を提供した。

両者に共通する見方

- ⑦その吟詠は千古に伝わった。
- ⑧名声と評判とは内外に振るった。

両者を総合した結論

- ⑩天帝の意図を君達は理會しなければならぬ。
- ⑫人間世界が好詩を求めている、(それで、好い詩を提供させるためにこの偉大な二詩人を遣わしたのである)ことを。

(二)説は、先に述べたとおりである。李白のことは、①⑥に、杜甫のことは、②⑤に述べている。③④⑦⑧⑨⑩は両者のことを述べている。⑪⑫は両者を総合した結論である、とする解釈である。

(三)説は、先に述べたとおりで、李白のことは、①⑤⑥⑧⑩に、杜甫のことは、②③④⑦⑨に述べている。⑪⑫は両者を総合した結論である、とする解釈である。

なお、韓愈はこの一年後(元和十一(八一六)年)に、「調張籍」という作品を作つて、似たような見解を示している。

しかし、楽天にとつては、李白はあくまでも杜甫に次いで学ばれるべき存在である、と考えられていたようである。それは、次の手紙によって言えよう。

- (五) ① 1485 ② 与元九書 ③ 07 ④ …… ⑤ 書 ⑥ 元和十(815)年 ⑦ 江(江州) ⑧ 四四歳 ⑨ 意宗

この作品は卷四十五にある。

元稹、字は微之(三十七歳)は、元和十年、貶謫先の通州で、自分の詩集をまとめた。それを友人の楽天に送るに際して、自己の文学観をまとめた手紙「序詩寄楽天書」(OST)を書いた。

楽天(四十四歳)は、この微之の手紙に対して、同年の十二月、江州で、「与元九書」を書いたのである。

楽天の文学観を何うには好都合の文章である。文中の文学論は、毛詩の大序、樂記の文学思想を、ほとんどそのまま布延したものである。初めの部分に総論というべきものがあり、続いて諷諭詩の歴史(その衰微史)ともいべきものが続く。諷諭詩は唐代に至って再興の兆しが見える、とする。その唐代の詩について述べた部分に、次の一節がある。この中に李白、杜甫についての記述が見える。

与元九書 元九に与ふるの書(節録)

〈A〉 唐興二百年、其間詩人不可勝数。所可举者、陳子昂有感遇詩二十首、鮑防有感興詩十五首。又詩之豪者、世称李、杜、李之作才矣奇矣、人不逮矣。索其風雅比興、十無一焉。杜詩最多、可传者千余篇、至於貫穿今古、颯然格律、尽工尽善、又過於李。然據其新安吏、石壕吏、潼関吏、塞廬子、留花門之章、「朱門酒肉臭、路有凍死骨」之句、亦不過三四十首。杜尚如此、况不逮杜者乎?

楽天は、李白、杜甫は、唐代に入ってより自分に至るまでの間の、詩人中の大家である、と見ている。しかし、『詩経』の「諷諭」精神の体得者、実践者、「諷諭詩」の作者という観点からすると、見るべき作品は大変に少ない、と言っているのである。

李白については、

○作品には才能があふれ、表現の奇抜さに富むものである。他の人は及ばない。しかし、見るべきものは全作品の十分の一もない。

杜甫については、

○伝えるべき作品は千余首もある。古今を通じる詩人の美点を吸収し、さまざまな歌詩の風体を具備するに至り、精工の限りを尽くし、美善の極を窮めていて、李白に勝る。しかし、三吏、芦子関、花門の章、自京赴奉先県詠懷五百字のごとき作品で取るべきものという、わずかに三、四十首に過ぎない。

という。

なお、この杜甫を高く評価する言辭は、楽天のこれまでの政治感覺、その作品製作の態度から考えて、当然彼自身のものであると言える。けれども、これより二年前(元和八年、813年)に元微之が杜甫の墓誌銘を書き、その中で世が李杜を併称するのに興を唱え、杜甫を揚げて李白を低く評価している。楽天は、微之のこのような見方から影響を受けているようである。

花房英樹博士は、上記文中の「豪」については、「至於貫穿、尽工尽善」をその内容説明であると見て、白楽天は、杜甫の歌

詩を、高く讃えている。そして、このような評価は元稹にもあつて、「杜君墓係銘の序」の「豪邁」と「清深」と「律切」という元稹の評価を、楽天は基本的にみとめていた。その立場でいえば、杜甫の文学は、「豪にして工」とでも、仮に名づけ得るものでもあつた。とされる。

〔B〕 又昨過漢南日、適遇主人集衆衆娛他賓、諸妓見僕來、指而相顧曰・・此是秦中吟、長恨歌主耳。自長安抵江西、三千里、凡鄉校、仏寺、逆旅、行舟之中、往々有題僕詩者。土庶、僧徒、孀婦、処女之口、毎々有詠僕詩者。此誠雕蟲之戲、不足為多。然今時俗所重、正在此耳。雖前賢如淵、雲者、前輩如李、杜者、亦未能忘情於其間哉！

この部分では、楽天は自分の作品について、自分の考えと立場を説明している。

楽天は、議論詩を第一に上げるべき文学としているから「秦中吟」が評判になったことは好いと考えていると思われる。

しかし、「長恨歌」に代表されるような、感傷詩がもてはやされるのは本意ではない。それは、言うなれば文学的戯作であるからである、というのである。

しかし、

○この種の文学は、(王褒や楊雄)李白や杜甫も作りたいたいという誘惑には、なかなか抗しがたかったものである。

と弁解がましく言っている。

楽天は、李白の神仙、山水、飲酒、婦女等を詠じたものの中

に、今評判になつて己の文学と通ずる気分のあるものを見出しているであろう。しかし、杜甫の場合は、どのような作品をそれとして考えているのであろうか？

この記事の後に、己の今の行きづまりは当然である、と述べて、続けて次のように言っている。

〔C〕 況詩人多寒、如陳子昂、杜甫、各授一拾遺、而遭劍至死。李白、孟浩然輩不及一命、窮悴終身。近日孟郊六十、終試協律。張籍五十、未離一太祝。彼何人哉、彼何人哉！

李白についてまとめる。

李白と孟浩然とを並記している。

(杜甫と孟浩然とを並記する形は前に掲げた「詠鄧魴詩」に見える。なお、陳子昂と李白とを並記する形が後に掲げる「江樓夜吟元九律詩成三十韻」に見える)

○李白は一度の任命を受けることもなく行き詰って身を終えた。杜甫についてまとめる。

陳子昂と杜甫とを並記している。(この形は前に掲げた作品「初授拾遺」、「傷唐衢二首その二」にも見える。)

○(陳子昂)、杜甫は一拾遺を授けられただけである。

(「拾遺」を授けられたという言い方は前に掲げた「詠鄧魴詩」にも見える。)

楽天は、李白、杜甫、共に不遇の詩人であった、と見ているのである。



さて、(四)で取り上げた、長安から江州へ赴くとき、手にしていたあの李杜の詩集は、多分身近に置かれたのであろう。そして、詩集を絶えず見ていたせいであらうか？あるいは、江州に不遇をかこつこと三年の悲哀が、彼をして一層不遇の李白を思わしめたのであろうか？

次の作品でも、元微之と自身の不幸にこと寄せて、李白のこゝとを詠い嘆いている。

(六) ①1009 ②江樓夜吟元九律詩成三十韻 ③003

④詩 ⑤五排 ⑥元和十二(817)年 ⑦江 ⑧四六歳 ⑨憲宗

この作品は、卷十七の「律詩」に分類されている。元和十二年、樂天四十六歳の時の作である。

江樓夜吟元九律詩成三十韻

江樓夜元九が律詩を吟じ三十韻を成す

- |             |              |               |               |            |            |           |          |
|-------------|--------------|---------------|---------------|------------|------------|-----------|----------|
| 8           | 7            | 6             | 5             | 4          | 3          | 2         | 1        |
| 奪尽碧雲妍       | 取将白雲麗        | 精微思入玄         | 清楚音諧律         | 顔墮淥江前      | 詞飄朱檻底      | 吟君數十篇     | 昨夜江樓上    |
| 碧雲の妍を奪い尽くす。 | 白雪の麗しきを収め将り、 | 精微にして 思 玄に入る。 | 清楚にして 音 律に諧ひ、 | 顔は淥江の前に墮つ。 | 詞は朱檻の底に飄り、 | 君が數十篇を吟ず。 | 昨夜 江樓の上、 |

- |            |           |           |              |           |           |           |               |             |               |             |              |              |             |              |              |               |             |                  |                 |             |              |            |            |   |
|------------|-----------|-----------|--------------|-----------|-----------|-----------|---------------|-------------|---------------|-------------|--------------|--------------|-------------|--------------|--------------|---------------|-------------|------------------|-----------------|-------------|--------------|------------|------------|---|
| 33         | 32        | 31        | 30           | 29        | 28        | 27        | 26            | 25          | 24            | 23          | 22           | 21           | 20          | 19           | 18           | 17            | 16          | 15               | 14              | 13          | 12           | 11         | 10         | 9 |
| 肉味経時忘      | 短卷写紅箋     | 斜行題粉壁     | 潜聞思婦伝        | 闇被歌姬乞     | 停住買人船     | 交流遷客淚     | 猿愁亦悄然         | 雁感無鳴者       | 月落為留連         | 星廻疑聚集       | 魚竜聴似禪        | 神鬼聞如泣        | 鈞案下從天       | 醴泉流出地        | 鏘鏘過管絃        | 瀕湧同波浪         | 文頭交比繡       | 珠排字字円            | 水扣声声冷           | 五彩爛相宜       | 八風凄聞発        | 双雕玉作聯      | 寸截金為句      |   |
| 肉味 時を経て忘れ、 | 短卷 紅箋に写す。 | 斜行 粉壁に題し、 | 潜に思婦の伝ふるを聞く。 | 闇に歌姬に乞はれ、 | 買人の船を停住す。 | 遷客の涙を交流し、 | 猿愁へて 亦た 悄然たり。 | 雁感じて 鳴く者無く、 | 月落ちんとして為に留連す。 | 星廻り聚集せんと疑し、 | 魚竜 聴いて禪に似たり。 | 神鬼 聞いて泣くが如く、 | 鈞案 下って天よりす。 | 醴泉 流れて地より出で、 | 鏘鏘として 管絃に過ぐ。 | 瀕湧として 波浪に同じく、 | 文頭 交りて繡に比べ、 | 珠のごとく排ねて 字字円かなり。 | 水のごとく扣いて 声声冷かに、 | 五彩 爛として相宜ぶ。 | 八風 凄として間に発り、 | 双雕 玉を聯と作す。 | 寸截 金を句と為し、 |   |

55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

頭風当日痊 頭風 当日に痊ゆ。  
老張知定伏 老張 知つて定めて伏せん、  
短李愛応顯 短李 愛して応に顯すべし。  
張十八籍、李二十紳、皆攻律詩、故云。

道屈才方振 道屈して 才方に振い、  
身閑業始専 身閑にして 業始めて専なり。  
天教声短赫 天 声をして短赫ならしめ、  
理合命速遭 理 合に命速遭なるべし。  
顧我文章劣 我が文章の劣れるを顧み、  
知他氣力全 他の氣力の全きを知る。  
功夫雖共到 功夫 共に到ると雖も、  
巧拙尚相懸 巧拙 尚は相懸なり。  
各有詩千首 各々詩千首有り、  
俱拋海一辺 俱に海の一辺に抛つ。  
白頭吟処交 白頭 吟処に交じ、  
青眼望中穿 青眼 望中に穿つ。  
酬答朝妨食 酬答して 朝に食を妨げ、  
披尋夜寤眠 披尋して 夜眠を寤す。  
老償文債負 老いて償ふ 文の債負、  
宿結字因縁 宿結す 字の因縁。  
每歎陳夫子 毎に歎ず 陳夫子、  
陳子昂著感遇詩称於世。

常嗟李謫仙 常に嗟す 李謫仙。  
賀知章謂李白為「謫仙人」。

名高折人爵 名高うして 人爵を折き、

56 思苦滅天年 思い苦しんで 天年を滅ず。  
陳竟無官、李亦早夭。

57 不得當時遇 當時の遇を得ず、  
58 空令後代憐 空しく後代をして憐ましむ。  
59 相悲今若此 相悲しむこと 今此の若し、  
60 浚浦与通川 浚浦と通川と。

楽天は、三十七〜四十句で、元微之に向かい、栄達の道が行き詰まって君の詩才は発揮され、身体が暇になったので、君は力を専ら詩に注ぐことが出来るようになったのだ。これは、天が君の詩人としての名声を赫赫たるものにするために、天道は君の運命を窮地に落としたのに違いない。ということが言えよう、といっている。また、五十三〜五十八句では、この不幸の形は、昔、陳子昂と李白において既に繰り返されたことを思い、嘆息するのである。そして、五十九〜六十句で、楽天には微之と共に、己の不幸も李白のそれに類するものである、と悲痛な思いに駆られるのである。

詩中 楽天は、李白について次のように言う。  
○李白のことを思い、いつも嘆息している。  
○詩名が赫赫たるが故に、官職においては挫折をした。  
○当時は不遇であった。  
○空しく後代の人々に憐憫の情を抱かせている。  
と。  
そして、翌年楽天は李白の墓を訪ねるのである。

(七) ① 1956 ② 李白墓 ③ 03 ④ 陵墓 ⑤ 七律 ⑥ 元和

十三(818)年 ⑦ 江 ⑧ 四七歳 ⑨ 意宗

この作品は、巻十七の「律詩」に入っている。

楽天には、李白に対して、まず不遇の人としての共感があり、李白の文学に引き付けられていたからであろう。更にまた、李白の頼みを受けて『草堂集十卷』を編集し、その序文も書いた李陽冰の素晴らしい篆書に心惹かれ、そこから気持ちが動いたことであつたかも知れない。いずれにしろ、楽天は、宜州(今の安徽省)当塗県の北、青山(牛渚山)の東麓にある李白の墓を訪ね、詠じているのである。

### 李白墓 李白の墓

- 1 采石江辺李白墳 采石江辺 李白の墳、  
眠る骨が、かつては、六朝以来唯一の詩人として、天地も驚かす名詩を作つたのだ、としみじみ思う。
- 2 逸田無限草連雲 田を遶りて 限り無く草 雲に連なる。
- 3 可憐荒隴窮泉骨 憐むべし 荒隴 窮泉の骨、
- 4 曾有驚天動地文 曾て驚天動地の文あり。
- 5 但是詩人多薄命 但だ是れ詩人 多くは薄命、
- 6 就中淪落不過君 就中 淪落すること君に過ぎず。

楽天は、草茫茫たる墓前に佇み、この荒れた塚の下、黄泉に

後半三句に李白に対する楽天の気持ちが出ています。

○李白は、昔は天地を驚かし揺るがす詩文を作つた。  
○詩人の多くは不運なものである。

○李白はとりわけひどく落ちぶれていた。

楽天には、己の淪落の悲しみを通じて李白の不遇が、痛いばかりに胸に響いて来ていたのである。

以後、楽天は李白と杜甫についてふれることを殆どしない。

そして、この江州での生活もまもなく終わりを告げるのである。楽天はこの年の十二月二十日、忠州刺史(四川省付近の知事)に任じられるのである。

ただし、以後において、ずうっと晩年になってであるが、楽天は李杜について一言ふれている。

(八) ① 822 ② 序洛詩 ③ 10 ④ …… ⑤ 序 ⑥ 太和八

(820)年 ⑦ 都(洛陽) ⑧ 六三歳 ⑨ 文宗

この作品は、巻七十にある。  
太和八年、六十三歳、洛陽での作品を編集し、「洛詩」が成つた時に綴つた序文の初めの部分である。

### 序洛詩 洛詩に序す(節録)

序洛詩、楽天自叙在洛之樂也。予歴覽古今歌詩、自風、騷之後、蘇、李以還、「注・李陵、蘇武始為五言詩。」次及鮑、謝徒、迄于李、杜輩。其間詞人聞知者累百、詩章流伝者鉅万。觀其所自、多因讒免譴逐、征戍行旅、凍餒病老、存没別離、情發於中、文形於外。故憤憂怨傷之作、通計今古、什八九焉。世所

謂文士多數奇、詩人尤命薄、於斯見矣。又有以知理安之世少、離亂之時多、亦明矣。

詩經以後多くの詩人が居た。その作品を見るに、多くは憤憂怨傷の作品で、それが八、九割を占めている。いわゆる文士の運命は数奇であり、詩人は最も不遇なのである。

そして、

○命薄き詩人の中に李白、杜甫もいた。  
というのである。

### 三、白楽天の李杜観

以上の検討から、楽天の李白、杜甫に対する見方、即ち「白楽天の李杜観」を逐条的にまとめる。へは取りあげた作品の順を示す。

まず、李白について。

イ、翰林学士である李白は江左に遊んだことがある。〈四〉

ロ、高い官職を得ること無く終わった。〈四〉

ハ、謫仙の悲しみを抱いた。〈四〉

ニ、樂府に新詞を提供した。〈四〉

ホ、吟詠は千古に伝わり、名声と評判とは内外に振るった。

〈四〉

へ、作品には才能があふれ、表現の奇技さに富む。他の人は及ばない。しかし、見るべきものは十分の一もない。〈五〉

ト、(楽天の感傷詩のごとき) 作品を作りたいという気持ちがあった。〈五〉

チ、一度の任命を受けることもなく行き詰まって身を終えた。

〈五〉

リ、詩名赫赫たるが故に官職において挫折をした。〈六〉

ヌ、空しく後代の人々に憐憫の情を抱かせている。〈六〉

ル、昔は天地を驚かし揺るがす詩文を作った。〈七〉

オ、不遇であった。〈六〉〈八〉

ワ、ひどく落ちぶれていた。〈七〉

次に、杜甫について。

イ、才能と名声とは、天地を兼ねるほどであった。〈一〉

ロ、拾遺にしかねなかった。(不遇であった) 〈一〉〈二〉

〈五〉〈八〉

ハ、(『詩経』以後衰えた) 諷諭詩を再び製作し始めた人である。

〈三〉

ニ、文壇に秀句を提供した。〈四〉

ホ、工部員外郎である杜甫は劍南に遊んだことがある。〈四〉

へ、戦乱に遭い一族離散の苦しみに逢った。〈四〉

ト、晩年に隱者のような苦しみを味わい身の上を恨んだ。

〈四〉

チ、その吟詠は千古に伝わり、名声と評判とは内外に振るった。

〈四〉

リ、伝えるべき作品は千余首もある。古今を通じる詩人の美点を吸収し、さまざまな歌詩の風体を具備するに至り、精工の限りを尽くし、美善の極を窮めていて、李白に勝るが、

取るべき作品は三、四十首に過ぎない。〈五〉

又、(楽天の感傷詩のごとき) 作品を作りたいという気持ちがあった。(五)

兩人がこのようであることについては、次のように言う。

○天帝の意図を君達は理会しなければならぬ。人間世界が好詩を求めている、(それで、人間に好い詩を提供させるためにこの偉大な二詩人を遣わしたのである) ことを。(四)  
なお、兩者の優劣については、楽天は次のように考えていたようである。

○李白は、あくまでも杜甫に次いで学ばれるべき存在である。

〈五〉

#### 四、結び

上述の李杜に言及する記事、即ち「白楽天の李杜観」には、以下に掲げるような特徴がある。

① (一) から (七) の作品が製作されたのは、全て憲宗皇帝の時代である。(八)「序洛詩」だけが文宗皇帝時代の作品である。

② 諷諭の作品があるかどうかという問題をとしている。

〈李杜の優劣は主としてこの点から論じられている。〉

③ 官職にこだわっている。(高い官職を得られなかったことに関連して、「不遇」であったという言い方をしている。)

これ等については、次のように考えることができるであろう。

(一)

① 楽天が官吏になったのは憲宗皇帝の時代である。楽天は、この皇帝に対して、官吏に取り立てられたということで感謝の気持ちを持っていた。憲宗は、政治に対して意欲的であった。楽天は、この皇帝によって理想の政治が実現されるといふ期待観を持った。そして、そのために役立ちたいと考えた。

② 諫官になった時、張り切つて勤め、意欲的に多くの諷諭詩を作ったのは、憲宗皇帝の理想の政治の実現のために役立ちたいと考えたからである。また、自己の行為は正しく理解されて、実際の政治に良い影響を与えられると信じていた。そして、李杜の作品を諷諭の点から評価したのは、その頃は、詩歌は政治に対して役立つものでなければならぬ、政治に対して役立つ諷諭詩こそが文学であるという考え方をしていたからである。

③ しかし、楽天の見通しは甘かった。楽天の行為は、楽天の期待通りには受け取られなかった。特に、要路の人々には反感を持って迎えられた。そして、左遷・貶謫という結果を招くのである。李杜の地位官職、即ち李白の翰林供奉、杜甫の拾遺等に関して、それ以上に昇進できず不遇に終わったことを問題としたのは、この諫官の地位こそは、政治に取つて最も重要なものであるにも拘わらず、誠実に勤めれば勤めるほど危険が増す官職であり、必ずしも努力に対応した結果が得られないことを、自己の体験から実感し、李白杜甫両詩人に同情したからであろう。

前述のの三つの特徴は、ここに述べたように、職責に忠実でありたいと努力した楽天の考え方や姿勢を反映したものであつ

たのである。

(一)

また、既に見て来たとおおり、楽天は、江州貶謫以後、李白、杜甫について言及することをほとんどしない。

これについては次のように考えられる。

それは、江州への貶謫という苦い体験を通して、この頃から、楽天は儒教以外の老荘思想を学び、仏教にも親しむ。そして、均衡の取れた人生を考えるようになる。言い替えれば、数年前までの儒教思想を前面に押し出したような、いわば兼済の思想を実践する生き方を弱める。そして官界における身の振り方にも慎重になり、独善の思想を実践する。その結果、人生の、少なくとも官吏としては落伍者であった李白や杜甫は、手本とすべき人物ではなくなったからであろう。

李白の詩も、不遇の時代においてであったればこそ共感もあり同情も出来て、注目し読んだのであって、以後は大詩人の作品として読むことはあっても、特に影響を受けることは少なくなつたためであろう。

杜甫の飄論詩については、楽天が官界に入ったばかりの、理想に燃え、血気盛んであった若年の頃には、杜甫の民衆の叫び、訴えを代表するような作品を、政治の落ち度を指摘するものとして、創作の手本に出来た。しかし、諫官の立場を離れ、官界で時が経ち、人民を治めることを考える官吏の立場において腰が座つて来ると、役人と庶民の立場の相違も明確に意識されて来る。楽天は感覺的には比較的庶民に近い役人であり得たとしても、本質的には庶民の苦悩は持ち得ない立場であり性格であ

る。その点が杜甫と違っている。それ故、杜甫のそれ等の作品も、楽天には手本に出来るもので無くなって来たからであろう。皇帝が替わり、地位も移って、楽天の思想や態度も変わったからである。

〔注記〕

(1) 『白氏長慶集』 文学古籍刊行社 一九五五年出版に

よる。なお、朱金城箋校 『白居易集箋校』 上海古籍出版社 一九八八年十二月第一版を参照した。

(2) 花房英樹著 『白氏文集の批判的研究』 昭和四十九年 朋友書店再版の「総合作品表」による。

「年齢」「皇帝」等は、花房英樹著 『白居易研究』 一九七一年三月三十一日 世界思想社出版 「白居易年譜」による。

(3) (一)(二)(三)はそれぞれ次による。

(一) 統国訳漢文大成 白楽天詩集二 佐久 節訳解  
国民文庫刊行会 昭和四年四月十五日再版発行 五四八、五四九頁。

(二) 新釈漢文大系 白氏文集三 岡村 繁著 昭和六三年七月二十五日 明治書院 三三三、三三四頁。

(三) 「白楽天と李杜」石川忠久著 新釈漢文大系 季報 No.75 昭和六三年七月発行 明治書院。

(4) 青木正児博士の「李白年譜略」による。『李白』漢詩大系八 昭和四十年五月三十一日初版 集英社出版 三六〇、三六一頁参照。

なお、大野実之助氏は「李太白年譜」で、翰林供奉となつたのを、天宝元（七四二）年と見、翰林を辞去したのは、天宝三載（七四四年）の冬より翌四載（七四五年）春に至る間と見ている。

『李太白研究』 早稲田大学出版部 昭和三十四年四月二十七日初版 七〇三、七〇四頁参照。

(5) 韓愈の作品は、次である。

①148 ②調張籍 ③05 ④五古 ⑤嘲戲 ⑥元和十一年（816）年 ⑦京師 ⑧四十九載 ⑨憲宗

「李杜文章在、光焰万丈長。不知群兒愚、那用故誇傷？

蚍蜉撼大樹、可笑不自量。伊我生其後、拳頭遙相望。

夜夢多見之、昼思反微茫。徒觀斧鑿痕、不矚治水航。

想當施手時、巨刃磨天揚。垠崖劃崩豁、乾坤擺雷頤。

惟此兩夫子、家居率荒涼。帝欲長吟哦、故遣起且僵。

翦翎送籠中、使看百鳥翔。平生千萬篇、金薤垂琳琅。

仙官勅六丁、雷電下取將。流落人間者、太山一豪芒。

我願生兩翅、捕逐出八荒。精誠忽交通、百怪入我腸。

刺手拔鯨牙、拳鬣酌天漿。騰身跨汗漫、不著織女襄。

願語地上友、經營無太忙。乞君飛霞佩、與我高頡頏。

韓愈の詩の第十七〜二十句は、楽天の詩の第十一、十二句に対応するものと言つて良さそうである。

(6) これは友人元微之が通州から送つて来た「叙詩寄楽天書」に答えた長文の手紙である。両者の手紙には対応する

ところが多い。楽天の手紙も力を込めて書いたと見えてよくまとまつている。従つて、楽天の文学観を知るのに好都合の資料となつてゐる。引用文は、その中の唐代の詩について述べた部分。

(7) 元微之の作品は、『元氏長慶集』卷五十六にある。

①0961 ②唐檢校工部員外郎杜君基係銘并序 ③56

④…… ⑤墓誌 ⑥元和八（833）年 ⑦…… ⑧三十五

歳 ⑨憲宗

初めの部分は、「与元九書」の諷諭詩の衰微の歴史を述べた部分と形が似ている。唐代の李白、杜甫の詩について、次の如く言つてゐる。

「至於子美、蓋所謂上薄風騷、下該沈宋、古傍蘇李、氛奪曹劉、掩顏謝之孤高、雜徐庾之流麗、尽得古今之體勢、而兼人人之所獨專矣。使仲尼考鍛其旨要、尚不知貴、其多乎哉！苟以為能所不能、無可不可、則詩人以來、未有如子美者。是時山東人李白、亦以奇文取稱、時人謂之李杜。余觀其壯浪縱次、擲去拘束、模写物象、及樂府歌詩、誠亦差肩於子美矣。至若鋪陳終始、排比聲韻、大或千言、次猶數百、辭氣豪邁而風調清深、屬對律切而脫棄凡近、則李尚不能歷其藩籬、況堂奧乎！」

(8) 前掲(2)の 花房英樹著 『白居易研究』

四九六頁参照。

(9) この詩には、元微之に唱和した作品がある。

『元氏長慶集』卷十三の「酬楽天江樓夜吟韻詩因成三十韻」である。

(10) 李陽冰は篆書に巧みで、天下にその名声を博していた顔真卿とその名を等しくし、顔真卿の書碑には必ず李陽冰

が題簽を書くのを常とした。(前掲の大野実之助著『李太白研究』二五五頁参照。) 棗天もその書を好んだと見えて、元和十三(八一八)年、四十七歳、江州での「素屏語」の中で、李陽冰に言及している。

「素屏素屏、胡為乎、不文不飾、不丹不青、当世豈無李陽冰之筆字、張旭之筆跡、辺鸞之花鳥、張藻之松石。(以下略)

(11) 「李白墓 李白は唐の代宗の宝応元(七六二)年、当塗(今の安徽省)で亡くなった。墓はその東南の竜山に造られ、元和十二(八一七)年に西六華里の青山の南に遷された。この詩の作はその前なる元和十一年のように見える。」

田中克己著 『白棗天』 漢詩大系十二 昭和三十九年七月三十日初版 集英社 二六七頁脚注参照。

また、顧肇倉・周汝昌著 『白居易詩選』 一九六二年北京 作家出版社 五頁には、「約為貞元十五年宣州時作」と注している。

しかし、製作年代については、花房博士説によった。

元和十三年に作られたこの詩は、この移葬された墓を詠んだものであろう。今の安徽省馬鞍山市の南方、采石山下にある采石鎮に「唐李翰林之墓」と刻する石碑がある。

王汝弼選注 『白居易選集』 上海古籍出版社 一九八〇年十月第一版 一八一頁参照。

\* 本論は、次の旧稿を再考し、改稿したものである。

○「李白に対する白居易の気持」 『漢文学』 第十三輯

福井漢文学会 昭和四十四年三月三十一日発行

十四〜二十一頁。

○「杜甫に対する白居易の気持」 『古典と現代』 第十

四号 明治書院 昭和四十一年四月十五日発行

十四〜十八頁。

\* 本論の要旨を左の会で発表した。

日本教育大学協会北陸地区国語科・書道科合同研究協議会

平成五(一九九三)年十月四日(月)午後二時〜三時半

富山大学教育学部会議室

\* 一九九三年十月十五日 改稿了。

(本学教官)